

心理療法における物語的アプローチの批判的吟味

—物語概念の適用と運用の観点から—

教育心理学コース 野村 晴 夫

Critical Review of Narrative Approach in Psychotherapy :
Application and Operation of the Concept "Narrative"

Haruo NOMURA

Narrative approach has a widespread influence on recent research and practice of psychotherapy. However, the concept "narrative" is used so variously that the argument is confused in this area. The purpose of this article is to investigate various uses of the concept "narrative" and discuss future directions of narrative approach in psychotherapy. The uses of the concept were reviewed from the viewpoint of application and operation of the concept in psychoanalysis, cognitive therapy, and family therapy. It was suggested that the excessive application of the concept "narrative" would lead to relativism and disregard of scientific aspects of psychotherapy. And the necessity to operate narrative as data source and scrutinize narrative was indicated in order to clarify the significance of narrative approach in psychotherapy. I would emphasize the pragmatic possibility of partial or modest narrativism.

目 次

- I. 本論の目的
- II. 物語的アプローチとは何か
- III. 物語概念の適用
 - (1)精神分析
 - (2)認知療法
 - (3)家族療法(ナラティブ・セラピー)
- IV. 物語概念の運用
 - (1)現実を映す物語
 - (2)現実を構成する物語
 - (3)限定的な物語運用の方向性
- V. 物語的アプローチの将来展望
 - (1)物語概念の適用範囲の拡大と相対主義
 - (2)物語の精緻な分析に向けて

I. 本論の目的

近年、人文社会科学領域の関心を広く集めている物語的アプローチ(narrative approach)は、心理学においても盛んな議論を呼び起こすところとなり(Sarbin, 1986; Polkinghorne, 1988; Bruner, 1986, 1990), 社会学(片桐, 2000; 浅野, 2001)や医療人類学(Kleinman, 1988;

江口, 1999)などの近接領域を巻き込んだ学際的展開をみせている。なかでも、心理療法における同アプローチの影響は、研究のみならず、心理療法という実践にまで及んでいるところに特徴がある(e.g., McLeod, 1997, 2001)。物語的アプローチは、既存の心理療法の実践に対するアンチテーゼとして援用されることも多く、客観性や実在性に疑義を呈する社会構成主義的なポストモダンの思潮(Burger&Luckmann, 1966; Burr, 1995)とあいまって、旧弊な心理療法の実践を批判する急先鋒と目されることもある。しかし、物語的アプローチは、心理療法において、新しい動向として迎えられた一方で、古くからの伝統を再定式化しているという見方もできる。後者の見方からすれば、心理療法は、歴史的草創期からすでに物語と深い関わりを有しており、その意味では、心理療法は遍くナラティブ・セラピーであるということになる(Byng-Hall, 1999)。では、心理療法において、ことさらに今、物語的アプローチを採るということは、その実践や研究に対して、どのような意義や有用性を持ち得るのであろうか。ここで問われるのは、物語的アプローチにおける「物語」という概念の用いられ方である。「物語」という概念は、きわめて包括的かつ多義的であるがゆえに、この概念がどのように規定され、その上で、どのように用いら

れているのかといった根本的な議論が、広範な概念使用の傍らで、なおざりにされてはいないだろうか。たとえば、物語概念の適用されている対象が、語るという行為なのか、その行為によって産出された語りなのかは、暗黙裡に前提されながら、明示されていない主張も少なくない。加えて、物語概念のさまざまな適用例において、物語にどのような役割を担うことが想定されているのかも、一様ではない。たとえば、物語に、語っている「今」(心的状態等)を明らかにするための情報源としての役割を担うことが想定されているのか、あるいは物語を産み出す行為自体が、語っている「今」を構築するという役割を担うことが想定されているのかといった、異なる前提が横たわっている。こうした概念の曖昧さを残す現況は、まさに物語的アプローチの目指す複眼的・多元的状况であると考えられる向きもある。しかし、「物語」や「ナラティブ」を心理療法に冠することが、あたかもポストモダンと同義であり、是とするかのような風潮、あるいは、スローガンとしての物語概念といった風潮が招かれる恐れも否定できない。認知心理学や発達心理学の領域における研究上は、物語概念の定義が厳しく問われるのに比べ、心理療法の諸理論においては、明確な定義づけが、必ずしも十分とは言えないとの指摘もすでになされている(Russell & Lucariello, 1992; Reissman, 1993)。特に日本では、神話や民話など、古来よりの寓話的な物語と、クライアントの語る物語との相同性を意識したアプローチを物語的アプローチとみなす場合などもあり、物語概念をめぐる混乱が指摘されている(e.g., 児島・森, 2002)。

そこで、本論ではまず、心理療法において物語概念が使用されている現在の様相を明らかにすることを目的とする。物語概念の曖昧さを留めることが、心理療法の実践と研究上、長短併せ持つにせよ、その概念使用の様相を把握することは、物語的アプローチの今後を占う上で必要と考えられる。本論では試みに、物語概念の使用を、概念が何を指し示しているのかという概念の「適用(application)」の観点と、そうした物語概念にどのような役割遂行が期待されているのかという概念の「運用(operation)」の観点から検討を加える。ここで、「適用」と称しているのは、行為や事物に物語という概念をあてはめることを言い、概念が使用される文脈上では、「物語としての～(～ as narrative)」という表現からその様をうかがい知ることができる。一方で、「運用」と称しているのは、物語概念を行為や事物に適用した上で、その概念を心理療法の実践において

用いることを言い、概念が使用される文脈上では、「～としての物語(narrative as ～)」という表現からその様をうかがい知ることができる。適用と運用という二つの観点から整理することで、概念使用の様相をつまびらかにし、さらに、物語的アプローチの将来的な展開可能性を探る。

II. 物語的アプローチとは何か

まず、心理療法における物語概念の使用を検討する前提として、諸領域で展開されてきた物語的アプローチがどのようなものなのか明確にしておこう。物語的アプローチは、行為や現象に対して、物語という概念を適用することを中核的な主張として、これまで歴史学や哲学、文芸批評などを舞台に展開されてきた(e.g., Mitchell, 1981; Ricoeur, 1985)。すなわち、史実の記述や、時間の分節など、領域によって物語概念の適用対象は異なっている。

このように人文社会科学系の諸領域で物語的アプローチが展開されるなかで、心理学領域では、まず、Sarbin(1986)が、物語に対して、諸事象を理解するための「根元的メタファー」の地位を与えている。その論拠とされたのは、たとえば、Michotte(1963)による因果性の知覚の実験である。この実験では、スクリーン上に映し出された幾何学的な図形の運動を観察した被験者が、その観察内容を報告する際に、図形の運動に因果性や順序性といった物語的な筋立てをあてはめて報告することが見出されていた。つまり物語は、流れ行く時間を分節し、経験を体制化することで、経験に意味を見出すための原理を表すメタファーとして心理学に導入されたと考えられる。そして、物語概念は、対話という相互行為やその産物を指し示すだけではなく、自己(Gergen, 1991)、人生や文化(Bruner, 1987)等のメタファーとして、心理学においてもさまざまに適用対象を広げていった。このような多岐に渡って使用されている物語概念が共通して内包するのは、何らかのまとまりを持たせるための編集過程、あるいはその過程を経た産出物という点であろう。その過程の内実については、時系列性や因果性など、筋立てることを指す場合が多い。

こうして、心理学は、物語的アプローチを採ることで、人間の諸行為・諸産物を理解する新たな方途を得たと言えるだろう。そして、物語的アプローチは、心理学の研究のみならず、実践においても、有効性を問われてきている。

Ⅲ．物語概念の適用

まず、物語的アプローチを採る諸理論において、物語概念が、どのように適用されているのかを概観整理する。その際、適用されている対象を明らかにすることに加え、適用に至る経緯についても勘案する。なぜならば、物語概念の適用は、既存の理論・実践のある側面を問題として浮き上がらせ、既存概念と対置させることに始まったとみられ、その経緯を勘案することは、この概念の適用意義を知る上で有益と考えられるからである。そこで、精神分析、認知療法、家族療法という既存の理論枠組みに則り、それぞれの理論における物語概念の適用対象と適用に至る経緯を検討する。

(1)精神分析

精神分析における物語概念の使用は、その草創期に遡るとの指摘がある。森岡(1999)は、今日の物語的アプローチが主張する論点の多くが、すでに精神分析草創期のプロイヤーによるアンナ・Oの事例報告に現れていると考えている。患者であるアンナ自身が、その治療過程に名づけた「お話療法(talking cure)」は、過去の出来事を想起して語ることが、症状の消失に関わっていたことに着目した表現であり、物語的アプローチの一端をここに見ることができる。Phillips(1999)もまた、Freud自身が術語として“narrative”という語を用いてはいないものの、暗黙的ながら、物語や物語的自己同一性といった概念が、精神分析の創始からすでに存在していると考えている。すなわち Freud は、症状を、物語の一貫性(coherence)の崩壊とみなし、そうした崩壊した物語は、無意識の意識化を通じて、修復され得ると考えていた。このような物語的アプローチの着想を初期の精神分析に見出す主張の嚆矢は、すでに Schafer(1981, 1992)や Spence(1982, 1986)に見受けられる。Schafer は、外傷経験の想起が治療的に働くという精神分析の中心的な仮説に異論を唱え、治療場面で着目すべきは実際に起きた出来事ではなく、その出来事に対する患者の語り方であり、分析家の仕事は、それを語り直すこと(retelling)であると考えた。彼の主張は、無意識や転移といった概念を他の精神分析理論に比して軽視していることから、これがはたして精神分析といえるのか否かという議論(e. g., 岡野, 1989)はあるが、Schafer 自身は、むしろ精神分析の原点に立ち返っていると考えている。そして、歴史的眞実(historical truth)と物語的眞実(narrative truth)を峻別

した Spence(1982)も、治療場面で実際の経験以上に物語を重視した点で、精神分析における物語的アプローチの代表的論者として Schafer と並び称される。彼は、客観的な過去の事実性に基ついた歴史的眞実ではなく、物語的眞実を分析家と患者との間で確立することを重視している。そこでの分析家の仕事は、患者がより満足できる物語の構築を促すことになる。

これらの議論にみられる物語概念は、患者によって精神分析場面において語られた産出物に適用されるとともに、患者の語りに分析家が筋立てを見出し、構成的に聴き取るための手立てにも適用されている(e. g., Wyatt, 1986; 土居, 1992; 森岡, 2002)。そして、以上の適用経緯に共通する論点は、「物語的アプローチは、精神分析の始まりとともにすでにあった」という点である。つまり、精神分析における物語概念の適用経緯は、近年の人文社会科学領域における物語論的転回(narrative turn)の影響によって新たに採用されたというよりも、むしろ、伝統的な精神分析理論の強調点を移すことによる理論の読み替え、あるいは解釈学的な再評価といった論調が優勢である。たしかに、Freud は後期著作で、考古学的に過去の記憶を忠実に想起すること以上に、記憶に基礎を持ちながらも物語として再構成することの治療的意義を述べており、Schafer が自らを精神分析の源流への回帰と認めるのは、この点に着目したためであろう。

そして、伝統的精神分析の強調点をずらして読み替えるなかで、物語概念は、歴史性や事実性と対置されて用いられるようになる。さらに、Ricoeur(1985)による歴史と物語に関する主張が、頻繁に援用され、その対置を際立たせる。したがって、物語概念を適用することで精神分析が目論んだことのひとつには、患者の物語の歴史性や事実性以上に、虚構性に対する着目があったと考えられよう。ただし、精神分析における物語概念の適用範囲は、虚構性を時にはらむ患者の語りのみならず、さらに広範に及んでいる様も見受けられる。Schafer(1981)が、「精神分析が治療であると考ええるということ自体が、それが物語の選択である」と述べるように、物語概念を患者の語りや分析家の聴取法に対して適用するだけではなく、精神分析という治療理論それ自体に対しても、メタファーとして適用する主張が見られる。ここに至って、物語概念は、事実性・歴史性のみならず、理論が目指すところの普遍性や一般性とも対置されて適用されていると考えられるだろう。こうした概念適用の広がりを受けて、Phillips(1999)は、精神分析で用いられる物語概念の

適用対象を3つに分けている。

- ① 患者の人生物語(life narrative)の語り直し
- ② 分析家の準拠する精神分析的発達理論
- ③ 精神分析的治療の経過と構造

物語概念の適用対象は、具体的な現象としての患者の産出する物語(①)から、ひいては、一般性の高い理論や治療機序(②, ③)まで、広範に渡っている。精神分析の物語的アプローチにおいて、物語概念は、患者の語りや分析家の聴取法から理論にまで、適用の対象を広げていったと考えられる。

(2)認知療法

認知療法は、現代の欧米で隆盛を極めるエビデンス・ベースト・アプローチによる心理療法の中核的地位を占めている(丹野, 2001)ため、とかく対置されることの多い物語的アプローチとは、他の諸理論に比べて親和性が低いとみなされがちかもしれない。けれども、近年は、認知療法にも構築主義(constructivism)¹⁾の影響の波が押し寄せており(Wachtel, 1997)、従来からの合理主義的アプローチとは対照的な、構築主義的アプローチのなかに、物語的アプローチの影響を読み取ることができる。合理主義的な認知療法では、クライアントの認知の「歪み」という、何らかの基準からの逸脱を想定していたのに比べると、構築主義的アプローチは、そうした基準の妥当性に疑義を呈している。構築主義的アプローチは、合理的で情報処理的な従来の認知心理学が、クライアントにとっての意味生成(meaning making)を相対的に軽視してきたと批判し(Gonçalves, 1992)、その一方で、物語的アプローチを採用したと考えられる。

認知療法における物語的アプローチでは、物語概念は、まず心的表象(Gonçalves, 1994)、スキーマの構造(Russell & van den Broek, 1992)に適用された。スキーマを介入標的としているという点では、伝統的な認知療法の延長線上にあると言えるだろう。こうした物語概念の導入経緯は、認知心理学、発達心理学領域におけるスクリプト(Schank & Abelson, 1977)や自伝的記憶想起(Neisser & Fivush, 1994)の研究における知識表象に対する物語概念の導入経緯と類似している。たとえば、Russell & van den Broek(1992)は、物語をスキーマ的表象の基礎形式(fundamental form of schematic representation)とみなし、その形式を物語スキーマ(narrative schema)と呼んでいる。彼らによれば、この物語スキーマは、複数の出来事間の相互関係、出来事とその主体との関係、認知・言語的複雑性の3次元か

ら構成され、それぞれに着目した介入によって、物語スキーマの変容が目指される。

また、彼らのように物語概念をスキーマの形式へ適用することに明示的ではないが、認知物語療法(Cognitive Narrative Therapy)を提唱するGonçalves(1992, 1994, 1995, 1999)もまた、物語概念を積極的に認知療法に導入するひとりである。彼は、Sarbin(1986)の主張に依拠しつつ、物語概念を、クライアントが意味を構築するための媒介物(vehicle)に適用している。彼もやはり、人々が出来事を組織化するために用いる形式として物語概念を想定しているため、「心理療法は、ナラティブの同定、構築、脱構築という一連のシナリオとみなすことができるだろう」(Gonçalves, 1994)と述べられているように、その形式が如実に現れる原型的物語(prototype narrative)を見出し、介入の標的としている。認知物語療法に特徴的なのは、理論上、物語概念を採用した上で、さらにそれを実践する際の、介入の構造化程度の高さである。まず、介入の目標は、より一貫して(coherent)、より複雑で(complex)、より多様な(diverse)物語の構成に据えられる。すなわち、「良い物語」がどのようなものかについての基準を持ち、機能的ではない物語を、「より良い物語」へ変容することが目指されている。そして、物語の想起(recalling)、客体化(objectifying)、主体化(subjectifying)、比喩化(metaphorising)、投企(projecting)という5段階の介入プロセスを順に辿り、クライアントには、原型的物語を同定し、それを繰り返し語り直すことが求められる(Gonçalves, 1994, 1999)。

認知療法においては、他領域の物語的アプローチに比して、物語概念の適用範囲が明確かつ限定的である。そのため、上述の通り、介入の構造化程度が高いという伝統的認知療法の特徴が、物語的アプローチに則りつつも保たれている。認知療法の特徴としてさらに挙げられることには、介入効果やプロセスの研究と臨床実践とがともに推進されることがある。この特質もやはり、物語的アプローチにおいても維持され、微視的で精細な物語分析が盛んに試みられている(e.g., Russell & van den Broek, 1992, 1993)。認知療法では、物語概念を、クライアントの内的表象形式に適用することで、その実践と併せ、研究においても、物語概念の有効性を探る方向性をもたらしただと言えるだろう。

(3)家族療法(ナラティブ・セラピー)

ナラティブ・セラピーは、「物語(narrative)」をその名に冠している通り、物語概念を心理療法実践の中核

に据えることを、もっとも明確に主張している。そして、日本では、White & Epston(1990)、および Anderson & Goolishian(1992)による実践が代表的なナラティブ・セラピーとして紹介されている。White & Epston(1990)は、出来事の解釈行為にテキスト・アナロジーを用い、物語概念をその主なアナロジーに適用している。すなわち、物語概念は、語られた産出物に適用されるとともに、やはり、経験を組織化する原理にも適用されている。ただし、ナラティブ・セラピーにおける物語概念の適用対象は、認知療法におけるそのようなスキーマ的な内的表象には留まらない。Whiteらは、フォーコーによる言説と権力に関する議論を引用していることからもうかがえるように、「人々を征服する統一された知」についてもマクロな物語概念をメタファーとして適用し、こうしたマクロな物語を人々が相対化し、その支配から引き剥がすことを企てる。そのために、影響相対化質問(relative influence questioning)と呼ばれる質問を投げかけることによる問題の外在化や、手紙などの文書を積極的に活用するなど、物語的アプローチに基づく技法を提唱している。したがって、White & Epstonにとって、物語概念は、クライアントの産出する局所的な語りと、その語りに抑圧的な作用をもたらす政治的な「大きな物語」に適用されることによって、両者の間の支配—服従関係を浮き彫りにしたとみられよう。

一方、Anderson & Goolishian(1992)は、社会構成主義(social constructionism)の具現化としての心理療法を、より明確に打ち出している。ただし、彼女らの主張は、「治療技法論というより治療思想あるいは治療のメタ理論のレベルに属するもの」(楳林, 1999)という指摘もあり、Anderson自身も特定の技法とみなすことには否定的である(Anderson, 1997)。Andersonらは、自らの主張が、従来の心理療法の諸技法と同様の次元で、またひとつ新奇な技法を提唱しているとみられることを慎重に避けるような議論を展開している。その背景には、従来の心理療法の専門性に対する強い懐疑が見受けられ、彼女らは、そうした専門性自体がクライアントの自由な語りを束縛し、セラピストがいわば「共犯者」となることに注意を促している。すなわち、Andersonらの主張において、物語概念は、心理療法の専門性にまで適用され、この「大きな物語」としての専門性に対して、White & Epston が政治性に対して向けたものと類似した批判の目が向けられている。そこで、彼女は、専門的技法ではなく、「無知の姿勢」と称する逆説的な姿勢を提唱することで、心理療法から

従来の意味での専門性や先見的知識を排除することを目論む。こうした姿勢は、心理療法の実践上の構造にも影響しており、たとえば、その参加者には、クライアント本人や家族成員だけではなく、過去に類似の問題を抱えていた他のクライアントなどが含まれることさえある。いわゆる専門家だけではなく、多様な参加者を受け入れることによって、新たな物語が生成されることを目指していると考えられる。こうした専門性への自省的な懐疑は、逆説的処方をはじめとする戦略的で積極的な介入を活用するシステム論的家族療法への一種の反動とも受け取れよう。Anderson(1997)は、「セラピストの仕事は常に質問を探していくことにある」と述べるように、極度に専門性を排した質問によって会話の空間を拓けることを企図し、指示的介入を控えている。セラピストが立脚する「大きな物語」としての普遍的な専門性を排し、クライアントとの間で局所的な物語を協同生成することを重視していることがみて取れる。

以上に述べた White & Epston と、Anderson & Goolishian との間には、その実践における社会構成主義の徹底程度などの点で、さまざまな相違は指摘されている(e. g., 浅野, 2001)。しかし、相違はあるものの、それらに共通しているのは、物語が、クライアントとセラピストとの間の協同的な対話行為や、その産出物に適用されていると同時に、両者の背後に横たわる社会文化にも適用されているところであろう。ナラティブ・セラピーと総称される一群の心理療法理論は、むしろ、後者の方をより強調している様うかがえる。すなわち、症状や問題をそもそも症状「化」し、問題「化」するクライアントの文化(家族、民族)、セラピストの文化(専門性)に刮目させ、症状や問題を相対化させる意図を読み取ることができる。彼らの主張において、物語概念が、自己と社会とを架橋し、両者を循環させる媒体に適用されるのは、臨床場面のミクロな物語と、社会文化的なマクロな物語が、内容的相違は残しつつも、形式的・構造的相同性を保つことを前提としていると考えられる。Anderson & Goolishian(1992)は、問題が、何らかの対処行動によって「解決」される存在ではなく、問題を問題とはみなさなくなるという視点の転換により「解消」される存在として考えている。「セラピーで扱われる『問題』とは、社会が作り上げた物語や社会がもたらす自己規定から発する何かである」(Anderson & Goolishian, 1992)と問題が定義されるように、社会から自己に向けられる不当な権力を意識している様が見受けられ、その権力は、物語という言説形

式をとることで、社会から自己へ(あるいはその逆に自己から社会へ)浸透することを前提にしていると思われる。

Anderson & Goolishian(1992)は、Bruner(1986)が提起したパラダイグマのモードと物語的モードという認識様式²⁾に則り、前者が心理学や精神医学についての専門的知識の立場に、後者が無知の立場に立つと考えている。こうした主張からは、心理療法における物語が、専門的知識を含めた社会文化という「大きな物語」への対置概念として導入されていることがわかる。ただし、ナラティブ・セラピーにおける物語概念の強調点は上述の通りだが、その立脚する社会構成主義では、現実が人々の間で言語的に構成されるという中心的主張(Burr, 1995)に基づき、語っている自己をはじめ、広範な対象に物語というメタファーが適用されている。

IV. 物語概念の運用

心理療法における物語概念の適用について、その適用経緯と併せ、以上に概観してきた。概念をある事象に適用するということは、ただ単に名付けることのみには留まらない。概念適用に続くのは、その概念を活用し、ある種の役割を遂行させるという、概念運用であろう。そこで、次に、物語概念が、心理療法において、どのように運用されているのかを概観する。まず、代表的な運用方法として、物語が、語っている語り手の心的状態、あるいはその語りの場を含む実生活についての情報をもたらすと想定する立場を概観する。さらに、その立場に対する批判を検討する。

(1)現実を映す物語

McLeod(1997)は、精神分析や認知療法における物語は、心理的現実の基底に迫るための材料、あるいは情報源として運用されていると考えている。こうした運用方法では、クライアントの物語は、対象関係や愛着関係、あるいは、スキーマなどについての情報を得るために用いられている。クライアントが繰り返し言及する物語には、その語り手の対人関係的なパターン(Crits-Cristoph, Connolly, & Shaffer, 1999; Wahler & Castlebury, 2002)、臨床場面における治療的変化(Bucci, 1995)、病理(Dimaggio & Semerari, 2001)などが反映されると考えられているのである。たとえば、Luborsky, Barber, & Diguier(1992)は、転移についての信頼性ある指標を得る目的で、クライアントの語りをコーディングし、親兄弟のみならず、セラピストも含

めた広範な対人関係に共通する葛藤(中核的葛藤関係テーマ: Core Conflictual Relationship Theme)を同定した。ほかにも、ライフストーリー研究で知られるMcAdams(1985)は、物語の背後にあるライフ・テーマを探り、隠された心的ダイナミズムを明らかにしようとしており、これらの研究は、物語を情報源として運用しているとみられる。このように、物語の内に語り手の心的状態が映し出されており、したがって、物語が情報源として運用され得るという考え方自体は、決して新しいものではない。TATやロールシャッハ・テストなどのアセスメント方法は、その代表例であろう。物語概念の情報源としての運用には、心的表象を構造化して言語表出する仕方に、心的状態や対人関係といった「現実」(心的・物理的の両者を含めて)が反映されているという前提に立っていると考えられる。

(2)現実を構成する物語

一方、物語をそのような心的状態の情報源として運用するだけではなく、幅広い現実構成という運用方法を想定する立場もある。この立場は、自己や世界が、言語的に構成されると主張する社会構成主義に、より忠実な発想である。そこでは、語るという行為自体に主たる関心があるため、物語の背後に何かを求めるという傾向に乏しい。この立場からは、前述のような情報源としての物語の機能は、次のように批判される。たとえば、White(1995)は、人生を映す鏡や「地図」として物語を運用する立場を写実主義的であるとして、批判する。また、Gergen & Kaye(1992)は、やはり、物語を内的なレンズやモデルとして運用することは、個人の精神内界を強調した個人主義的傾向を持ち、物語の単一性を志向すると批判して退け、ポストモダンな物語論に傾いている。あるいは、Anderson & Goolishian(1992)は、認知療法における物語的アプローチについて、「認知面を重視したコンストラクティヴィズム・モデルも、結局は、人間を単純な情報処理機械として規定するものであり、意味を生成するものとは捉えない点で実用性に限界がある」と批判している。物語を内的なスキーマに適用し、情報源として運用する立場は、ここで言及されているコンストラクティヴィズム(構築主義)モデルの代表例とみなせる。この批判も、やはり物語の適用範囲と、そこからもたらされる運用方法についての見解の差異から生まれていると考えられよう。ただし、物語的アプローチに基づく認知療法は、むしろ情報処理理論を乗り越える試みとして現れてきた経緯があるため、この批判の妥当性には、疑問

も残る。

(3)限定的な物語運用の方向性

情報源としての物語の運用に関する上述の議論は、以下のように整理することができるだろう。たとえば、Brown, Nolan, Crawford, & Lewis(1996)は、物語を人々に内在する「実感(true feeling)」の何らかの反映とみなす立場と、そうした心的状態を必ずしも想定しない立場の2種類があると考えている。前者では、その反映されている実感を探す方向性、すなわち、情報を得る目的で物語を運用する方向性が導き出される。一方、後者では、そうした物語運用を素朴な写実主義とみなす批判に通じるだろう。

物語を情報源として運用する立場と、それを批判して現実構成の機能として運用する立場を概観してきたが、昨今、その批判に対する批判も提起されている。すなわち、物語概念の運用方法を、現実構成機能に至るまで広く捉える立場を批判する機運が見受けられる。ここでは、Holmes(1997, 1998, 1999)による物語運用の見解を例に、そうした機運を検討する。

成人愛着面接(Main, Kaplan, & Cassidy, 1985)に基づく心理療法を実践するHolmes(1997)は、物語の運用に限界設定を企て、部分的物語主義(partial narrativism)を提唱した(Holmes, 1998, 1999)。成人愛着面接は、対象関係論に比較行動学、情報処理の認知心理学を援用したBowlby(1969, 1973, 1980)による生涯発達の愛着理論に基づいており、語られた物語から成人期の愛着の様態を探るという意味では、物語を情報源として運用する立場にあると考えられる。では、彼は物語に「部分的」と冠することで、何を目論んだのか。

Holmesは、心理的健康を左右するものとして、物語の生成(story-making)と物語の解体(story-breaking)との弁証法を想定している。すなわち、新たな経験に出会ったとき、人がそれまで保持してきた物語をいったん解体し、これまでの経験と新たな経験を整合的に説明可能な新たな物語を生成することの弁証法に、心理的健康の要因があると考えている。こうした前提に基づいた成人期愛着研究の功績は、臨床場面における物語のもっともらしさ(verisimilitude)を評価するための客観的な基準を見出したことにあり、いわば物語の科学性(science of narrative)を示し得たところにあると彼は考えている。物語の評価規準を見出すことは、物語を愛着の様態に関する情報源として運用する立場から必然的に要請され、実証的な物語運用の先鞭をつけた。もしも、物語を情報源として運用せず、現実構成

機能としての運用を唱えるのみであったならば、物語の科学性を示すことはかなわなかったであろう。彼は、「部分的」には留ることのない急進的な物語主義が、これまでの心理療法、さらにはその近接領域としての認知心理学や発達心理学の科学性、実証性を無視することに危惧を抱く。そして、同様に物語的アプローチの強い影響を受けている歴史学において、炭素年代測定法や統計が活用されていることを例に取り、物語の科学性という方向を探っている。

したがって、彼が部分的物語主義を提唱することによって目論んだのは、科学性を保った物語的アプローチという、極めてプラグマティックな方向性を示すことにあったと言えよう。急進的な物語主義が、臨床実践上のどのような動向を指しているのか、彼は明示してはいないが、行き過ぎた物語概念の広範な運用に対するひとつの警句とみなせるだろう。

V. 物語的アプローチの将来展望

物語概念が何を指し示しているのかという概念の「適用」の観点と、物語概念にどのような役割遂行が期待されているのかという概念の「運用」の観点から、物語的アプローチにおける物語概念の使用に検討を加えてきた。もちろん、このような観点は、物語概念使用の様相を概観整理するための試論であり、ふたつの観点相互の独立性が保証されているわけではない。概念の適用を広げれば、その概念の運用も広がる傾向はあるだろう。続いて、以上の試論から、物語的アプローチの将来性を検討する。

(1)物語概念の適用範囲の拡大と相対主義

物語概念の適用範囲を心理療法の専門性や、それを担保する理論にまで拡大することは、心理療法において、どのような事態を招き得るだろうか。物語概念の適用範囲に関わる物語分類として、Phillips(1999)による強硬な(strong)意味での物語と、穏当な(weak)意味での物語という分類がある。彼の分類では、前者は、ナラティブ・セラピーやBruner(1990)の議論など、物語と自己同一性を互換的に用いることを容認する立場とされる。一方、後者は、精神分析の物語的アプローチなど、物語を自己同一性の一次元に留める立場であるとされる。彼が指摘した物語に込められる意味の強弱は、自己同一性を例に取ってはいるが、やはり物語概念の適用範囲に関する議論間の「温度差」に着目していると考えられる。

ここで、物語概念の適用範囲を拡大する論調において、多く援用される Bruner(1986)の主張を振り返ることは、これらの議論を整理する上で有用だろう。Bruner は、人の認識様式をパラディグマ的モードと、物語的モードに二分し、後者に、人が経験から意味を見出す機能を想定した。ただし、モードという表現からも推測されるとおり、両者は人が世界を認識する際に相補的に用いられるものであって、そのどちらかに常に依拠するような相互排他的な関係が前提されていたのではない。しかし、心理療法においてこの議論が援用される際には、特に物語的モードが強調される傾向が強く、相対的にパラディグマ的モードが軽視される傾向にある。そのため、物語概念の適用範囲を、数学的論証に至るほどまで極端に広くみる立場の主張(e. g., Howard, 1991)では、物語的モードの相対主義的傾向が色濃くなる。相対主義は、逆説的に、物語概念を諸事象に適用するという自説そのものも相対化し、その結果、あらゆる理論に優劣をみとめない無政府状態を招く怖れもあるだろう。あらゆる理論が平等であると主張することは、あらゆる理論が自説の正当性を主張できないということと、表裏一体である。

一方で、心理療法には、パラディグマ的モードと親和性の高いエビデンス・ベイストな方向性がある。医学領域では、すでにエビデンス・ベイストとナラティブ・ベイストとの関連についての議論が、心理療法領域よりも先行しており、両者を融和させ、相補的な関係と捉える議論が現れている。たとえば、Greenhalgh & Hurwitz(1998)により編まれた“Narrative Based Medicine”の著者には、従来、エビデンス・ベイストを標榜し、それに基づく臨床と研究に従事していた者も含まれており、医学領域におけるナラティブ・ベイストは、医師の実践知を明らかにする方向性と考えられている(加藤, 2002)。河合(2001)もまた、物語が外的現実と乖離し、個人のなかで妄想と化すことの危険性を指摘し、心理療法家が「現実」について注意を払う必要を述べている。

こうしたナラティブ・ベイストとエビデンス・ベイストとの相互補完的活用のなかに、Bruner の提示した物語的モードとパラディグマ的モードという認識論のひとつの統合的な実践形態をみることはできないだろうか。もちろん、このような試みが、潜在的には、実証主義と社会構成主義とを架橋する困難な企てであることは否定できない。しかし、社会構成主義を徹底させ、物語概念を拡大適用することは、心理療法の実践という受益者(クライアント)を重視する倫理性の観点

からみて、はたしてどのような妥当性を持ち得るのか。加茂(1998, 2001)がソーシャルワークへの物語的アプローチを吟味したように、物語概念を自己や理論といった広範な諸事象に適用することの功罪を、心理療法においても、今一度問い直すことが必要ではなかろうか。とりわけ、日本における心理療法は、欧米におけるエビデンス・ベイストの潮流と関わりが薄い。生物学的精神医学が、クライアント(患者)の語りや主観的意味を相対的に軽視してきたことへの反動形成的に(Kleinman, 1988)物語的アプローチが興ったという欧米における歴史的経緯を日本は共有していない。日本では、物語概念を拡大適用する急進的な物語論が、科学性から心理療法をますます遊離させる論拠と目される危険を考慮する必要があるだろう。

(2)物語の精緻な分析に向けて

物語概念を諸事象に適用するという機運は、諸事象の間に、虚構性や構造といった物語概念が内包する性質が、相同的に共有されているとの仮定から生じる。だからこそ、物語概念を実践・研究上に運用する方向性が生まれる。しかし、この相同性の仮定は、そもそもどれだけの信憑性を持つものなのだろうか。物語を情報源として運用し、語られた物語に映し出された諸事象を探求する立場は、この仮定の信憑性を明らかにしようとしているとも考えられるだろう。そのため、この立場では、情報源としての語られた物語を精緻に分析する傾向が強い。一方で、こうした情報源としての物語運用を批判し、現実構成機能としての物語運用を強調する立場は、心理療法場面で新たな物語が生成されることを目指す傍らで、語られた物語を精緻に分析する方向性、あるいは上述の仮定を明らかにする方向性には乏しいと言わざるを得ない。

物語の適用や運用についてどのような立場に立つにせよ、上述の相同性の仮定をはじめ、物語的アプローチには、物語の精細な分析を通じて、明らかにすべき点は少なくないと思われる。たとえば、クライアントの語りについてのグラウンディッド・セオリー等に基づく質的分析(Rennie, 1994; Kogan & Gale, 1997)、臨床的介入に際しての有効な語りの抽出(Dimaggio & Semerari, 2001)、クライアントの語りの変容と実生活の変容との関連の探索(Russell & Lucariello, 1992)といった研究の方向性は、今後も必要であろう。あるいは、Levitt & Angus(1999)が開発した分析枠組み(Narrative Process Coding Scheme と称される)のように、物語を分析する信頼性高い枠組みが求められるだろう。

また、ライフストーリー研究の領域ではあるが、やまだ(2000)は、有意味な物語の構成ルールとして、数学的合理性は望めずとも、物語的合理性が存在する可能性を示唆し、そのルールを探求する必要性を述べている。あるいは、物語論に則ることに明示的ではないが、一般に解決志向アプローチで知られる de Shazer (1994)もまた、「クライアントや治療者が使う言語の背景や深層にある物を探すことよりも、クライアントや治療者が使う言語こそが私たちが研究し続けなくてはならないすべてである」と述べるように言語に注目を寄せている。いずれも、物語に何らかの法則性を見出そうとしていると考えられ、上述した物語の精細な分析の方向性と機を一にしている。セラピストの信奉する理論への固執ではなく、臨床場面で今まさに進行している言語実践への微視的な着目が、物語的アプローチの目指すべき課題ではないだろうか(e. g., Russell & van den Broek, 1993)。そして、物語を情報源として運用する立場は、諸々の批判はあるものの、物語の精細な分析(定量的にせよ定性的にせよ)により法則性を明らかにしようとしている点において、有用性をみとめられるだろう。

物語的アプローチによって、心理療法は何を得て、何を失うのか。筆者は、物語的アプローチの可能性を全面的に訝るものではない。しかし、物語は、出来事のある側面を際立たせる代償として、他の側面を背景に追いやる。物語的アプローチを採るということが、心理療法にどのような功罪をもたらすのか、明らかにする視点が求められていると筆者は考える。

補注

- 1) 本論では、“constructionism”には「構成主義」，“constructivism”には「構築主義」の訳語をあてた。これは、心理学領域において概ね認められる慣行に倣ったためであるが、社会学等の近接領域では、この訳語が入れ替わることも多い。さらに、原語を使い分ける当否をめぐっても、欧米の論者間に相異があることが、邦訳の統一を難しくしている。このあたりの事情については、千田(2001)に詳しい。構成主義(constructionism)も、構築主義(constructivism)も、人が現実を“construct”する(構成／構築する)機能に着目するところは共通しているが、現実を“construct”する「場」としては、前者では人々の間を、后者では個体内を主として想定しているところに違いがある。その違いを際立たせるため、構成主義(constructionism)は、社会構成主義(social constructionism)と表記されることが多くなっている。
- 2) Bruner が提起した認識・思考様式は、パラディグマ的モード(paradigmatic mode: 範例的モード、論理科学的モードとも訳される)と物語的モード(narrative mode)に分けられる。前者が、論理的証明によって、普遍的で数学的な真理の発見を目指すの

に対して、後者は、みごとなストーリーによって、真実味のある意味をもたらすことを目指す。

(指導教官 下山晴彦助教授)

引用文献

- Anderson, H. & Goolishian, H. 1992 クライアントこそ専門家である：セラピーにおける無知のアプローチ 野口裕二・野村直樹(訳) ナラティヴ・セラピー 社会構成主義の実践 1997 金剛出版 Pp.59-88.
- Anderson, H. 1997 Conversation, language, and possibilities: A post-modern approach to therapy. Basic Books. 野村直樹・青木義子・吉川悟(訳)2001 会話・言語・そして可能性：コラボレイティブとは？セラピーとは？ 金剛出版
- 浅野智彦 2001 自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ 勁草書房
- Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss: Vo. 1. Attachment. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 Attachment and Loss: Vo. 2. Separation. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss: Vo. 3. Loss. New York: Basic Books.
- Brown, B., Nolan, P., Crawford, P., & Lewis, A. 1996 Interaction, language and the “narrative turn” in psychotherapy and psychiatry. Social Science & Medicine, 43, 1569-1578.
- Bruner, J. S. 1986 Actual minds, possible worlds. Cambridge: Harvard University Press. 田中一彦(訳) 1998 可能世界の心理 みすず書房
- Bruner, J. S. 1987 Life as narrative. Social Research, 54, 11-32.
- Bruner, J. S. 1990 Acts of meaning. Cambridge: Harvard University Press. 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳) 1999 意味の復権 ミネルヴァ書房
- Bucci, W. 1995 The power of the narrative: A multiple code account. In J. W. Pennebaker(Ed.), Emotion, disclosure and health. Washington, DC: American Psychological Association. Pp.93-124.
- Burger, P. L. & Luckmann, T. 1966 The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge. New York: Doubleday. 山口節郎(訳) 1977 日常世界の構成 新曜社
- Burr, V. 1995 An introduction to social constructionism. 田中一彦(訳) 1997 社会的構築主義への招待：言説分析とは何か 川島書店
- Byng-Hall, J. 1999 Creating a coherent story in family therapy. In G. Roberts & J. Holmes(Eds.), Healing stories: Narrative psychiatry and psychotherapy. New York: Oxford University Press. Pp.131-151.
- Crits-Cristoph, P., Connolly, M. B., & Shaffer, C. 1999 Reliability and base rates of interpersonal themes in narratives from psychotherapy sessions. Journal of Clinical Psychology, 55, 1227-1242.
- de Schazer, S. 1994 Words were originally magic. New York: W. W. Norton & Co. Inc. 長谷川啓三(監訳)2000 解決志向の言語学：言葉はもともと魔法だった 法政大学出版局 P.13.
- Dimaggio, G. & Semerari, A. 2001 Psychopathological narrative forms.

- Journal of Constructivist Psychology, 14, 1 - 23.
- 土居健郎 1992 方法としての面接 医学書院
- 江口重幸 1999 病いの経験を聴く:医療人類学の系譜とナラティブ・アプローチ 小森康永・野口裕二・野村直樹(編)ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社 Pp.33-54.
- Gergen, K. J. 1991 The saturated self: Dilemmas of identities in contemporary life. Basic Books.
- Gergen, K. J. & Kaye, J. 1992 Beyond narrative in the negotiation of therapeutic meaning. In S. McNamee & K. J. Gergen (Eds.), Therapy as social construction. Sage. 野口裕二・野村直樹(訳) 1997 ナラティブ・モデルを越えて ナラティブ・セラピー 金剛出版 Pp.183-218.
- Gonçalves, O. F. 1992 From epistemological truth to existential meaning in cognitive narrative psychotherapy. Journal of Constructivist Psychology, 7, 107-118.
- Gonçalves, O. F. 1994 Cognitive narrative psychotherapy: The hermeneutic construction of alternative meanings. Journal of Cognitive Psychotherapy, 8, 105-125.
- Gonçalves, O. F. 1995 Hermeneutics, constructivism, and cognitive-behavioral therapies: From the object to the project. R. A. Neimeyer & M. J. Mahoney (Eds.), Constructivism in psychotherapy. American Psychological Association. Pp.195-230.
- Gonçalves, O. F. & Machado, P. P. P. 1999. Cognitive narrative psychotherapy: Research foundations. Journal of Clinical Psychology, 55, 1179-1191.
- Greenhalgh, T. & Hurwitz, B. 1998 Narrative based medicine: Dialogue and discourse in clinical practice. London: BMJ 斎藤清二・山本和利・岸本寛史(監訳)2001 ナラティブ・ベイスト・メディスン 臨床における物語りと対話 金剛出版
- Holmes, J. 1997 Attachment, autonomy, intimacy: Some clinical implications of attachment theory. British Journal of Medical Psychology, 70, 231-248.
- Holmes, J. 1998 Narrative in psychotherapy. In T. Greenhalgh & B. Hurwitz (Eds.), Narrative based medicine: Dialogue and discourse in clinical practice. London: BMJ 斎藤清二・山本和利・岸本寛史(監訳)2001心理療法における物語り ナラティブ・ベイスト・メディスン 臨床における物語りと対話 金剛出版
- Holmes, J. 1999 Defensive and creative uses of narrative in psychotherapy: An attachment perspective. In G. Roberts & J. Holmes (Eds.), 1998, Healing stories: Narrative psychiatry and psychotherapy. New York: Oxford University Press. Pp.49-66.
- Howard, G. S. 1991 Culture tales: A narrative approach to thinking, cross-cultural psychology and psychotherapy. American Psychologist, 46, 187-197.
- 片桐雅隆 2000 自己と「語り」の社会学:構築主義的展開 世界思想社
- 加茂陽 1998 ヒューマンサービス論:その社会理論の批判的吟味 世界思想社
- 加茂陽 2001 エンパワーメント論:ナラティブ・モデルの批判的吟味 社会福祉学, 42, 12-22.
- 加藤敏 2002 精神医学用語解説(236)NBM(ナラティブ・ベイスト・メディスン) 臨床精神医学, 31, 585-587.
- 河合隼雄 2001 心理療法における「物語」の意義 精神療法, 27, 3-7.
- Kleinman, A. 1988 The illness narratives: Suffering, healing & the human condition. New York: Basic Books. 江口重幸・五木田紳・上野豪志(訳) 1996 病の語り 慢性の病をめぐる臨床人類学 誠信書房
- Kogan, S. M. & Gale, J. E. 1997 Decentering therapy: Textual analysis of a narrative therapy session. Family Process, 36, 101-126.
- 児島達美・森俊夫 2002 ブリーフ・セラピーへの招待:M. ホワイト+S. ドゥ・シェイザー「家族療法の新しい方向性」を中心に 現代思想 30 Pp.70-83
- Levitt, H. & Angus, L. 1999 Psychotherapy process measure research and the evaluation of psychotherapy orientation: A narrative analysis. Journal of Psychotherapy Integration, 9, 279-300.
- Luborsky, L., Barber, J. P., & Diguier, L. 1992 The meanings of narratives told during psychotherapy: The fruits of a new observational unit. Psychotherapy Research, 2, 277-290.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50 (1-2), 66-104.
- McAdams, D. P. 1985 Power, intimacy, and the life story: Personological inquiries into identity. New York: The Guilford Press.
- McLeod, J. 1997 Narrative and psychotherapy. London: Sage.
- McLeod, J. 2001 Qualitative research in counseling and psychotherapy. London: Sage.
- Michotte, A. E. 1963 The perception of causality. New York: Basic Books.
- Mitchell, W. J. T. 1981 On narrative. University of Chicago Press 海老根宏・原田大介・新妻昭彦・野崎次郎・林完枝・虎岩直子(訳) 1987 物語について 平凡社
- 森岡正芳 1999 精神分析と物語(ナラティブ)小森康永・野口裕二・野村直樹(編)ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社 Pp. 75-92.
- 森岡正芳 2002 物語としての面接:ミメシスと自己の変容 新曜社 p.189.
- 植林理一郎 1999 行動化を繰り返した青年と家族との物語 小森康永・野口裕二・野村直樹(編)ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社 Pp.220-237.
- Neisser, U. & Fivush, R. 1994 The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative. New York: Cambridge University Press.
- 岡野憲一郎 1989 言語と洞察:R. シェーファーの臨床的言語論 現代のエスプリ 264 Pp.113-123.
- Phillips, J. 1999 The psychodynamic narrative. In Roberts, G. & Holmes, J.(Eds.), Healing stories: Narrative psychiatry and psychotherapy. New York: Oxford University Press. Pp.27-48.
- Polkinghorne, D. E. 1988 Narrative knowing and the human sciences. Albany: State University of New York Press.
- Ricoeur, P. 1985 Temps et récit. Paris: Edition du Seuil. 久米博(訳) 1990 時間と物語Ⅲ 新曜社
- Reissman, C. K. 1993 Narrative analysis. Sage
- Rennie, D. L. 1994 Storytelling in psychotherapy: The client's

- subjective experience. *Psychotherapy* 31, 234–243.
- Russell, R. L. & Lucariello, J. 1992 Narrative, yes; Narrative ad infinitum, No! *American Psychologist*, 47, 671–672.
- Russell, R. L. & van den Broek, P. 1992 Changing narrative schemas in psychotherapy. *Psychotherapy*, 29, 344–354.
- Russell, R. L. & van den Broek, P. 1993 Analyzing narratives in psychotherapy: A formal framework and empirical analyses. *Journal of Narrative and Life History*, 3, 337–360.
- Sarbin, T. R. 1986 The narrative as a root metaphor for psychology. In T. R. Sarbin(Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. New York : Praeger. Pp. 3–21.
- Schafer, R. 1981 Narration in the psychoanalytic dialogue. In W. J. T. Mitchell(Ed.), *On narrative*. University of Chicago Press. 海老根 宏ほか(訳)1987 精神分析の対話における語り 物語りについて 平凡社
- Schafer, R. 1992 *Retelling a life*. Basic books.
- Schank, R. C. & Abelson, R. 1977. *Scripts, plans, goals, and understanding*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 千田有紀 2001 構築主義の系譜学 上野千鶴子(編)構築主義とは何か 勁草書房 Pp. 1–41.
- Spence, D. P. 1982 *Narrative truth and historical truth*. Norton.
- Spence, D. P. 1986 Narrative smoothing and clinical wisdom. In T. R. Sarbin(Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. New York : Praeger. Pp.211–232.
- 丹野義彦 2001 エビデンス臨床心理学:認知行動理論の最前線 日本評論社
- Wachtel, P. L. 1997 *Psychoanalysis, behavior therapy, and the relational world*. 杉原保史(訳)2002 心理療法の統合を求めて:精神分析・行動療法・家族療法 金剛出版
- Wahler, R. G. & Castlebury, F. D. 2002 Personal narratives as maps of the social ecosystem. *Clinical Psychology Review*, 22, 297–314.
- White, M. 1995 *Re-authoring lives: Interviews & essays* by Michael White. 小森康永・土岐篤史(訳)2000 人生の再著述:マイケル, ナラティブ・セラピーを語る ヘルスワーク出版
- White, M. & Epston, D. 1990 *Narrative means to therapeutic ends*. 小森康永(訳)1992 物語りとしての家族 金剛出版
- Wyatt, F. 1986 The narrative in psychoanalysis: Psychoanalytic notes on storytelling, listening, and interpreting. In T. R. Sarbin(Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. New York : Praeger. Pp.193–210.
- やまだようこ 2000 人生を物語ることの意味:ライフストーリーの心理学 やまだようこ(編)人生を物語る:生成のライフストーリー ミネルヴァ書房 Pp. 1–38.